

思い出の記

牛越 恂

(昭和26年年)

私の岩手中学への入学は丁度終戦の年の昭和二十年でありました。あまり勉強もしないで作業の時間が多く、表紙も無く、墨で黒く塗りつぶした教科書、食べ盛りなのに弁当が無かったり、米だか芋だか豆だかわからないような混ぜ飯とか、着る服も靴も少しづつ配給される全く粗末なもので、貧困と混乱の時代でした。旧制から新制に変わり、混乱とめまぐるしい変化について行くのがやっとの生活で、本当に現在の生活から見たら別世界でありました。

しかしこの終戦後の混乱も次第に平静になり、昭和二十三年の新制高校への切かえの頃は大部分生活にも落ち着きがでて来たように思われます。そして何よりも高校一年になって私の心に深く印象づけられたのは音楽の授業でありました。別に深い理由もなく音楽を選択したわけでしたが、その最

初の授業で、背の高いのが特徴の、学校を卒業したての生内義夫先生が歌ったフォスター作曲の「ワールドブラックジョー」のメロディーが私の心に深く印象づけられたのでした。両手で弾くピアノのメロディーと不思議な魅力的な和音、先生のバリトンの声が一体となって一瞬われを忘れるような強烈な感動を私に与えたのでした。大袈裟に言うならば、今日の私の生活が決定された瞬間でした。

当時全く色気もない蛮からな雰囲気男子校の中に、この音楽の泉が丁度乾いた土に水がしみ込んで行くように流れて行ったのではないかと思えます。そして新時代への前進が学校中に起き、生徒も先生も努力したのでした。運動部はラグビー水泳、陸上、体操、アイスホッケー等で輝く成果を上げ私達一般の生徒もプライドを高く持てました。このような運動部の活動に呼応するかのようになり、文化部の活動も活発になり、特に音楽部の八十名による男声合唱団は名前もグリーククラブとして他校に類を見ない立派なものでありました。ドレミもわからないあの頃の私でしたが、現在の高校

生でもなかなか困難な清水修作曲の「秋のピエロ」とか、ロマンチックな情感のただよう「水夫のセレナーデ」等は今でも重厚なハーモニーとか美しいメロディーが耳に残り、自分のパートを暗譜で歌えるくらいです。

最初の外部での発表は、岩手大学農学部講堂における招待演奏でした。上級生の後にかくれる様に立ち、足をがくがくさせたりしたこととか、独唱の部分を歌った二級上の石塚氏の美しい声が昨日のようによみがえります。

指導する生内先生もありつただけの情熱を傾け、また指導を受ける生徒もそれを全身で受けとめ、まさに情熱と情熱のぶつかり合い、坩堝の中で燃焼するような激しいもので、高校生としてのエネルギーがそこに燃え、そうして心が純化して行ったものと思います。

練習も全く厳しく、月月火水木金の毎日で、放課後は自然に音楽室へ足が向くのでした。部員の中には個性的な人が多く、ラグビーの練習が終ると音楽室に駆けつける一級上の小沢氏、第一テノールの美声と豊かな声量で魅了した二級上の石

塚氏、成績がいつもトップクラスの村松氏とか井藤氏が一級上に居り、本当に多士済済であり、何か今日の高校生はこのような個性に欠けるような気がしてなりません。

この男声合唱としての活動がしばらくあってから、先生はそれに飽き足らず、岩手女子高校音楽部生徒との合同で「岩手フィルハーモニックソサィティ」と言う混声合唱団を組織して活動を開始したのであります。小学校四年生から女子と一緒に勉強する機会がなかった私は何か恥ずかしいやら、恐いやらの複雑な気持ちでした。加えて相手の女生徒は楽譜をペラペラ読むので、私は仮名をふったり、練習終了後にこっそりと復習したりして恥を最少にし、男のプライドを保つのに懸命でした。しかし最終的には男子の方が女子より勝るようになったのは男の意地の結実ではなかったかと思えます。練習した曲もモーツァルト作曲の「レクイエム」等をラテン語で歌いました。この曲は一般の実力ある団体しか演奏できない曲なのですからいかに当時努力をしたか、また指導が良かったかという証拠にもなりません。

しかし何にもまして心に残るのは当時の国語の先生であった水原一作詩、生内義夫作曲の交声曲三部作、岩手山、北上川、三陸海岸の演奏です。三曲で一時間位かかる大曲で、詩といい、曲の構成内容といまことにすばらしい曲で、演奏者、聴衆に深い感銘を与えたものです。そしてこの曲を中心に行う音楽会はいつも満員で聴衆を感動させ、その評判は広く県外にも及んだわけでした。その他、芸術祭への参加、公会堂のステージから東北六県への生放送、スタジオからの放送、

録音等があり、感動の連続、ひたむきに前進したものでありました。

今日までの私の人生でこれほど感動し、ひたむきになったというのはこの時代以外にはなかったと思います。多分私が後に音楽を勉強し、音楽の教師になった理由はあの時代の感動ではないかと思えます。今私が生徒に教える立場になって、教育というのは、いかに感動が大切であるかということをつくづく感じます。

毎日の厳しい練習が終ると、上級生、先生との語らい、こっそり焼き芋を買ってきて女生徒に分けてやったりして、本当に深い人間的なつながりがあり、教科以外の人間的成長は、この部活動で養われたものと思えます。

このように日々、感動と張りのある生活も私が三年生になった時に生内先生の退職でピンチになりましたが、新任の柳館先生、諸先輩の指導、長期の休み等に来盛して指導して下さる生内先生の力で、中学生をボーイソプラノ、アルトに男声を加えて男子だけの混声合唱や、水原一作詩、生内義夫作曲の演奏時間が三十分もかかる大曲「平和」の初演、国立音大オーケストラ伴奏で発表した「岩手山」、水原一作詩、生内義夫作曲の「岩手高校創立二十五周年記念祝典カンタータ」の演奏等と挫折することなく、日々活動できましたのは本当に幸せと思つて居ります。

人間の進路を決定するとき、最も多感な頃の感動とか体験がその要因となる場合が多い。私の場合もこの高校時代の音楽の活動がなかったならば別の路を歩んでいたのではないかと思えます。現在の自分の職業に誇りと充実感を感じているの

を考えると、まさに「私は岩手高校に学んでよかった!!」と、しみじみ感じる今日この頃であります。